

平成 26 年 5 月 15 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520832

研究課題名(和文) 近世後期の肥料商と地域市場

研究課題名(英文) Local Market and Manure Merchants in the Late Tokugawa Period

研究代表者

白川部 達夫 (shirakawabe, tatsuo)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：40062872

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近世後期の肥料商の経営を分析し、地域市場の展開を検討することを目的としている。これまで知られていなかった大坂干鰯屋仲間の近江屋長兵衛家や同市兵衛家文書を分析し、大坂干鰯屋仲間の仲間内取引の構造、江戸問屋との取引、摂津・河内や阿波への肥料販売の様相、幕末期の大坂への魚肥入荷量等を明らかにした。一方、下野国都賀郡西水代村の肥料商経営を分析し、19世紀になると後進地帯でも、村肥料商が成長し、手形による肥料前貸しを行うなど、新しい市場関係が成長していたことを指摘した。これにより停滞勝ちに見られていた近世後期の肥料商とその創り出す市場がダイナミックに変動している姿を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This study analyzes the management of manure merchants in the late Tokugawa modern period and clarifies how the local market developed in the same period. This study also analyzes the documents of Omiya Ichibe company and Omiya Chobe company of Osaka manure dealer association. The analysis reports on actual situation of manure sales to the surrounding area and the structure of the Osaka market. In addition, this study examined the manure merchant management in Nishimizushiro Village, Tsuga County, Shimotsuke Country. As a result of the study, it is clarified that the manure merchants grew even in backward areas in the 19th century and they lent manure by using the bills. The use of bills shows that new market participants constantly grew. By this study, it is also revealed that the market and manure managements in the late Tokugawa period were dynamically changing.

研究分野：史学

科研費の分科・細目：日本史

キーワード：肥料商 干鰯 粕 鮭粕 鮭 地域市場

1. 研究開始当初の背景

日本近世近代の移行期において、農業経営の中からブルジョア的発展の可能性を追求した戦前・戦後の研究は、干鰯・麦粕・鯀粕などの購入肥料の多量な投下による木綿・菜種作などの特産物生産が発展した事実を明らかにしてきた(戸谷敏之『近世農業経営史論』日本評論社、1949年)。さらに古島敏雄・永原慶二『商品生産と寄生地主制』(東京大学出版会、1954年)は河内綿作地帯で検証し、肥料直段の高騰と木綿など農産品価格の低迷を明らかにし、天保期におけるブルジョア的発展の転換(挫折)を指摘した。また特権の都市株仲間商人や肥料商人の前期的商業高利貸し資本の吸着を強調した。一方、山崎隆三『地主制成立期の農業構造』(青木書店、1961年)は、明治の松方デフレ期まで、西摂津の木綿作地帯ではブルジョア的富農経営が存在したことを指摘し、その根強い動きを強調した。これらの研究の中心は、農業経営論であり、肥料については史料の制約のため概略的にふれられるに過ぎなかった。古島敏雄らのテーゼは大坂市中の問屋仲間の肥料価格の変化と繰り綿直段の対比で導かれたに過ぎない。山崎の検討した西摂津の氏田家の経営帳簿も購入場所と支払い総額が年次的に記載されているだけである。今井林太郎・八木哲浩編『封建社会の農村構造』(有斐閣、1955年)の西摂津・岡本家の分析も経営分析が中心で肥料購入および市場については概括的に検討されたに過ぎなかった。

その後、肥料流通については原直史『日本近世の地域と流通』(山川出版社、1996年)古田悦造『近世魚肥流通の地域的展開』(古今書院、1996年)中西聡『近世・近代日本の市場構造』(東京大学出版会、1998年)平川新『紛争と世論』(東京大学出版会、1996年)石井寛治・中西聡『産業化と商家経営』(名古屋大学出版会、20

06年)など優れた研究が出た。

しかし在地の肥料商人や消費者である農民との関係、いわゆる肥料消費市場についてはほとんど研究がないのが現状である。この点で、包括的指摘を行ったのは荒居英次「近世農村における魚肥使用の拡大」(『日本歴史』264号)であるが、ここでは年利40%を越える肥料商人の高利の前貸し、出来秋の現物支払いと農作物の安値引き取りという前期的資本の性格が強調されている。しかし荒居の提出した史料は主として18世紀のもので、19世紀については不十分であり、戦前・戦後を通じた古島敏雄らの寄生地主制批判の基調を引き継いだもので、再検討の必要がある。

申請者は『江戸地廻り経済と地域市場』(吉川弘文館、2001年)において利根川中流域における幕末肥料商人の経営分析を行い、幕末期には荒居が主張したような前貸し・出来秋現物決済、高利貸しなどは行われず、現金販売を中心に、掛け売りとなった場合も年利12%であった事実を指摘した。

これらの問題を深めつつ、平成18~19年には科学研究費補助・基盤研究C「近世肥料商人の基礎的研究」、平成20~22年は科学研究費補助・基盤研究C「近世後期の特産地と肥料商」の交付を受けて研究を進めた。その成果として、摂津武庫郡上瓦林村岡本家文書の農業経営帳簿、尼崎干鰯屋梶家文書、下野国都賀郡西水代村田村家文書などを分析し論文を発表した。岡本家の分析では、手作り地主から小作への転換を肥料高騰による利潤低下に求めた八木哲浩の見解にたいして、岡本家は小作への転換期に手作りで八木の分析した以上の利潤を上げており、転換の理由を見直す必要を指摘した。また畿内での最初の肥料商経営の分析となった尼崎梶家文書では、天保期以降の肥料市場の状況を明らかにした。ことに大坂・兵庫を睨みながら魚肥の仕入れにあたった尼崎商人のあり

方や幕末期における綿作地帯から米作地帯への販売市場の展開など、肥料商のダイナミックな活動を明らかにした。

また関東の主穀生産地帯である下野都賀郡西水代村田村家をめぐる肥料流通の分析を通じて、江戸と並ぶ関東の干鰯集散地でありながら従来史料の欠如からまったく不明だった関宿干鰯問屋と在地肥料小売商の取引実態を明らかにした。

2. 研究の目的

これらの成果をさらに進めて、在地肥料商を核とした肥料消費市場の展開と変容について、19世紀を中心に明らかにして、同時期の地域市場のあり方を考察しようとした。主として大坂とその周辺については大坂干鰯仲間を代表し、後に大阪商工会議所会頭を勤めた近江屋市兵衛家の新出史料の存在が明らかになったので、この分析を行い文政・天保期から幕末維新时期までの市場変容を明らかにする。またこれにともない大坂湾岸の貝塚廣海家文書、阿波の大藍師で肥料商売を営んだ三木家や廻船問屋山西家、播磨相生の肥料商浜本家文書、近江東中野・小島家文書などを分析して同時代の比較を行う。またこれにともない所在調査をさらに広範囲で実施し、肥料商史料の把握に努めることにした。

3. 研究の方法

肥料消費市場の構造と変動を明らかにするためには、肥料商の経営実態が分析されなければならないが、その点については史料の欠如からほとんど分析がない状況である。申請者がこの研究に取り組み始めてから、史料の発見があり、現在その分析が課題となっている。史料は主として仕入れ帳と売り帳であるが、これらをエクセルでデータ化して分析するのが研究計画の中心をなす。ほかに関連調査が必要であるが、史料の発掘と撮影は一定程度進んだので、今回はできるだけ、データ

化と分析に力を注ぐこととする。データ化では大学の垣根を越えて作業担当者を求めたり、委託費の活用で作業の効率化を図る。大坂干鰯仲買の有力なメンバーだった近江屋市兵衛家文書が新たに発見されたので、この分析を中心に大坂湾岸 瀬戸内海市場の展開を視野に入れて分析を行う。

4. 研究成果

「近世後期主穀生産地帯の肥料商と地域市場」2012年3月

本論文では、下野国都賀郡西水代村田村家の肥料販売を通じて、19世紀の下野南部における肥料の消費市場の動向を検討した。

田村家の肥料商売は、文化末年には居村とその周辺に行われていたが、天保初年頃には関宿肥料問屋を中心に、 \times 粕7、800俵程度の仕入れ量になっており、天保末年には \times 粕1000俵を前後する販売を行うまでに成長した。その過程で西水代村から東側の古河藩中郷地域を中心に販売が広い範囲に拡大していった。一方、嘉永期になると次第に販売は縮小していき、拡張期の当主直蔵が万延元年(1860)に亡くなると、幕末維新时期には \times 粕200俵台の販売に戻り、村内と近隣への販売に限定しながら明治10年代にいった。

田村家の肥料販売は、天保期から嘉永初年頃までがピークであったが、この間、広い市場が販売の対象となった。田村家の肥料販売は前貸しで節季に代金を回収することが基本であったが、年末の支払いが中心だった。利子は文化・文政期で年利18%、天保期に入って年利15%、天保末年から幕末維新时期は年利12%と低下し、明治7年頃からは15%と上昇した。弘化期に栃木町の肥料商が年利15%を維持していた事例もあり、それから比べると、幕府の利子引き下げ令に素早く対応していたといえる。また栃木の肥料商が米による現物決済を行っていた事例があるのにたいして、ほとんど現金決済で現物決

済は西水代村などでわずかに過ぎなかった。

田村家では村むらで信用のある有力農民に通帳を配り肥料を販売した。「粕糠干鰯大福帳」の形式上は、こうして田村家と直接取り引きするものが基本となっていた。いっぽう直接田村家から前貸し信用が得られないような農民は有力農民に通帳を借りて、その信用で取引に参加し、田村家もそのことを容認していた。また引請・世話人というものもあり、代金回収に責任をもっていた。引請・世話人のなかには切手・手形を出して、農民に切手で田村家から肥料を受け取らせる方式をとるものがいた。このうち大規模に切手を出して、田村家の販売圏の周縁部に販売を広げるものがいた。通帳の貸与や引請という行為にともなう報酬などについては明らかに示すものがない。たんに親類、知人への口利きという好意的な融通から、営利的なものまで含まれたと思われるが、居村だけでなく数カ村のものに切手を発行しているものは、営利的な信用供与だったとみられる。村での濃密な人と人の共同体的結びつきを通じて行われる前貸し信用の供与から、営利的な信用供与まで重層的に含んで市場が構成されていたといてよい。とくに切手は一度発行されると、田村家側はそれを信用して肥料を渡すことで成り立っていたから、非人格的な性格を帯びていた。これらは後進地域にあっても、19世紀前半には非共同体的市場関係が展開し始めていたことを示すといえる。

「大坂干鰯屋仲間と近江屋長兵衛」2103年3月

本論文は近江屋長兵衛家文書を通じて、大坂干鰯屋仲間の取引実態の一端を明らかにしたものである。近江屋は寛政年間に干鰯屋仲間の問屋組（古組）に加入し商売を始めた。早くから松前物の取引に取り組み同最寄組合の中心となって、その入荷の増加と

もに成長したとされる。文政期には問屋組年番などを勤めた有力干鰯屋となった。

近江屋には、文政10年前後に市場売買の実態を示す史料が残されていた。西国・北国・関東物の干鰯・鰯粕は永代浜で市売にかけられたが、その支払いに手形が使用され、年番が仲間の積み金を管理した両替商などに振手形で指示して代銀を支払わせた。このシステムにより売り手（問屋）は、早く確実に代銀を回収でき、安定した取引が可能となった。買いと売りは支払いシステムでは切り離された上で、年番 両替商のもとで統合されており、これが市の構造の一部をなしていた。このシステムの構築により、永代浜の取引を干鰯屋仲間が掌握することが可能となったといえる。

一方、幕末期ではあるが、肥料の大坂入荷量が明らかとなった。安政初年には、大坂ではすでに、鮮粕・羽鮮などの蝦夷産の鮮系の魚肥が取引の主流を占めていた。これらは松前問屋 松前最寄組の間で取引され、入札を行ったので、市売は幕末期には少なくなった。いっぽう大坂市場では、鮮以外では、干鰯が中心となっており、鰯粕はわずかで、干鰯にたいする根強い需要をうかがわせている。兵庫との関係では、安政期にはなお大坂市場が優位であったが、明治期には鮮粕・羽鮮では大坂はやや優位なものの、安政期ほどの差はなくなる。大坂市場は安政から明治初年にかけて、蝦夷産鮮粕・羽鮮の生産・出荷の増加があったのに、それほど入荷量は増加しなかった。その分、兵庫や瀬戸内海諸港に流入して行ったことが考えられる。干鰯・鰯粕は明治前期には兵庫が優勢となっていた。

「大坂干鰯屋近江屋長兵衛と地域市場」2013年3月

本論文は前論文に続いて近江屋長兵衛家の取引を検討したものである。近江屋は市売

のほか、同じ問屋組のものなどから買合といわれる相対取引で魚肥を購入していた。また蝦夷地産の鯡・粕などについては、問屋仲買と共同で北前船商人に資金を前貸しして、大量に買い付けていた。

一方、近江屋は、岸和田や尼崎など湾岸都市とも深い関係があった。泉州では岸和田の問屋横山屋宇兵衛を通じて、尾崎などに送られてきた江戸の干鰯を購入していたことが明らかとなった。また下条大津浦の石津屋や貝塚の肥料問屋大岡屋とも取引があり、年賦の預り銀証文が作成されている。

尼崎の干鰯屋であった梶屋兵右衛門とは干鰯取引だけでなく、両替商として取引関係を結んでいた。同じく尼崎の干鰯屋安台屋太郎兵衛家の身代限りにあたっては、その整理を担当して、安台屋の預り銀証文を引き継いでいる。また猪名川と神崎川の合流点にある庄本村の河岸問屋株にも多額の資金を投資していた。

近江屋の在村への干鰯販売の経過は明確ではないが、200通に近い預り銀証文が残っている。預り銀証文とは、銀子を預けた形式をとった証文で、通帳などで引き継がれた債務を証文に書き替えて、返済を改めて確認するものである。摂津・河内などの在村を対象としたものは、無利子で年賦の分割返済契約で、返済が滞った場合は、改めて月1パーセントの利付きで返済をすることになっていた。一回の返済額も低く抑えられており、現実的に代金回収を考慮して、証文を作成したと考えられる。

大坂干鰯屋は農民と取引の上で、必ずしも厳しい対応をしていたのではなく、無利子分割返済を認めながら、滞りを回収しようとしていた。なお小作とする方向も考えられるが、近江屋には小作証文が数点しかなく、残された史料を見る限り、そうした指向性はうかがうことができない。

預り銀証文の分布を見ると大坂周辺では、

摂津では西成・島下・島上郡や河内の茨田・若江・河内の各郡が中心となっており、大坂より南部にはほとんどなかった。この河内諸郡は綿作地帯として知られた地域であった。また大和葛下郡にも取引がおよんでいた。一方、阿波では吉野川の平野部で藍の主産地に取引が広がっていた。阿波では文化年間から証文が見られ、近江屋は干鰯屋を開業して間もない頃から、積極的に取引を進めていたことがわかる。なかには取次を定めて、周辺農村に販売するなどしたため、代金滞りの額面も大きくなったものが見られた。

「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営（一）」2014年3月

近江屋市兵衛家は、近江屋長兵衛家の分家で、文政六年以降に、大坂干鰯屋仲間問屋組に加入した新興の問屋仲買商であった。仕入れでは天保元、2年には、銀7、800貫目程度を扱っていた。一方、販売では、文政12年（1829）には銀500貫目台であった。文政末から天保2年頃まで、いわゆる天保飢饉期の直前まで同家の商売は急速に拡大し、その後、天保飢饉の混乱期には低迷し、天保末年には回復がやや遅れたまま当主市兵衛が死亡したため、店を閉めて再興を待つことになった。

近江屋市兵衛家の分析を通じていえることは、天保期に江戸干鰯問屋からの仕入れの減少のなかで、干鰯から粕への転換の進展があったこと。また松前問屋からの仕入れが増加し、仕入れ・販売で総額の2、30%程度しか鞆の島市場での取引がなかったことが明らかとなった。鞆の島市場の諸国から入荷した品物を売りさばく機能は、関東産の干鰯・粕の入荷減少で低下し、問屋仲買が顧客の注文に合わせて、相互に手持ちの魚肥をやり取りする役割で維持されていたと見られる。

販売では、大坂の干鰯屋仲間と市中と近郊

の肥料小売商への販売、尼崎干鰯屋仲間を中心とする湾岸諸都市の肥料商への販売が一定の比重を占めたが、直接消費者農民については、ほとんど販売していない。

一方、市兵衛家が直接消費者農民にまで、販売を及ぼしたのは、阿波でのことであった。天保初年までは、阿波国板野・名西郡を中心とする藍生産地域へ販売総額の3、40%の魚肥を販売し、小売商と思われるものだけでなく、直接生産者農民へ多く販売していた。阿波では文政・天保期には買い積み廻船を積極的に取り入れた山西庄三郎などの廻船問屋が急速に成長しており、返り荷として魚肥をもたらし、干鰯問屋として活動していた。こうした買い積みの阿波廻船の展開は、大坂干鰯屋の魚肥販売と競合していた。また北前船の着船増加もあって、近江屋市兵衛家の阿波取引も天保末年にはふるわなくなっていくと考えられる。

以上の諸論文の分析を通じて、前期的高利貸し資本として一括りにされ、ともすれば停滞的に論じられた肥料商とその地域市場が19世紀にはダイナミックな展開をしていたことを明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

白川部達夫「大坂干鰯屋近江屋市兵衛の経営(一)」(『東洋大学文学部紀要』67集史学科篇39号、51-76、2014年)査読無し

白川部達夫「大坂干鰯屋仲間と近江屋長兵衛」(『東洋大学人間科学総合研究所紀要』15号194-214、2013年査読有り)

白川部達夫「大坂干鰯屋近江屋長兵衛と地域市場」(『東洋大学文学部紀要』66集史学科篇38号、43-94、2013年)査読無し

白川部達夫「近世後期主穀生産地帯の肥料商と地域市場」(『東洋大学文学部紀要』65集史学科篇37号、111-164、2012年)査読無し

6. 研究組織

(1)研究代表者

白川部 達夫 (SHIRAKAWABE, Tatsuo)
東洋大学・文学部・教授